

課題 次の文章を読み設問に答えなさい。

自己・世界・他者

人間と世界との「あいだ」は、開かれた境域として機能するということを述べたが、いかえれば自己と世界を契機として、「あいだ」が「あいだ」として機能しているといつてよいであろう。ところがさらにこの「あいだ」を構成している契機として、他者（たち）という契機を見落としてはならない。

さきに近世初頭のパースペクティブ思想の箇所指摘しておいたように、世界はそれぞれの視点に別様に現れてくるのである。①世界の現われが複数のであり、わたくしへの世界の現われはそのなかの一つにすぎないということが理解されてはじめて、視点としての自己理解が可能となるのである。視点が視点であるためには、視点は複数でなければならない。そうでないと視点とはいえないわけである。しかし他方では視点は他者によって代替できない自己性という根源性をもっている。視点とはそれを生きることによってはじめて視点の名にふさわしいものとなる。視点のアポリアとでもいべき②自－他の相互制約の構造がここに見いだされる。

形式的に言えば、わたくしはわたくしであつて他者になることができない。わたくしは他者でない、と同様に他者もまたわたくしではない、なぜならわたくしは原理的に他者の立場に立ちえないで、他者について、いったいなにをどこまで語りうるのか、そのことが当然のこととして問題になってくる。それには他者の他者性の③経験が可能であるのかどうか、また可能であるとすればどういう仕方なのか、ということがまず問われなければならない。というのは、他者の他者性を踏まえたうえで、はじめてわたくしについていえることを他者にもいいうのかどうかを問うことができるからである。ただ、いちおうは、視点の例が語っているように、他者の存在の前提なしにはわたくしがわたくしであるという自己理解もまたありえないということだけは、はっきりいえるであろう。このようにわたくしが「他者たちのなかの一人」であるという理解なしに、わたくしはわたくしの自己というものを語ることはできないばかりか、そもそもわたくしと特定の他者とが理解しあうこともできないのである。

だいたい複数の主観ということが現代の思想のなかで問題とされてきた経緯は、まず科学的対象（さらに文化的事象全般）の客観性の構成ということからであった。つまり客観性の成立条件としての多数主義ということがまず問題にされたのである。もともと近代の学問論が最初から知識の客観性を普遍妥当性という性格によって規定しようとしたこと自体が、すでに客観性を共同主観的な性格から見ようとしていたことを告げている。つまり「いつでも」という遍時性、「どこでも」という状況非拘束性に加えて、「だれにでも」という性格が、客観性規定のなかに相互主観的な共通性が含まれることを表わしている。

もちろん現代では④「だれにでも」という対象の妥当性のうえでの客観性だけが問われるのではなく、複数の主観どうしで、相互に対話しつつ、意識の修正とか合意をとおして、共有する対象知の客観性を形成していくことを重視し、この対話による伝達（コミュニケーション）という言語行為を客観性の構成の条件のなかに含めて議論していることはいうまでもない。

最初このように客観性の構成の条件への問いとして登場した⑤相互主観性の問題が、やがてだんだんと、「私の等根源的な主題としての他者の経験はいかにして可能か」という問いに深まって行った。このようにして、客観性への問いは、今日、他者の問題系の方向を開く一つのきっかけになっている。

（新田義弘、哲学の歴史－哲学は何を問題にしてきたか、講談社現代新書 1989年より一部改変して抜粋）

設問1. 下線①の意味を30字以内で説明しなさい。

設問2. 下線②について述べていると考える部分を文中から抜き出し40字以内で記しなさい。

設問3. 文脈的に考えて、下線③の文の主語は何か記しなさい。

設問4. 下線④の意味を30字以内で説明しなさい。

設問5. 下線⑤について、どのようなことであるかと考えるか200字以内で記しなさい。

【解答例＝内倉】

設問 1.

自他の視点に現われる世界がそれぞれ別様に存在すること (29字)

設問 2.

他者の存在の前提なしにはわたくしがわたくしであるという自己理解もまたありえない (39字)

設問 3.

わたくし

設問 4.

代替不可能な視点の間で認めうる、対象知を共有するための共通性 (30字)

設問 5.

自己と世界を契機として「あいだ」が機能し、「あいだ」は他者たちを契機として構成される。自己の視点は他者のそれによって代替することができないため、世界の現われはいつでも複数のである。そういった視点の特徴から、対象知の客観性規定のなかに「だれにでも」という性格を含めることは難しい。そこで、複数の主観どうしで、相互に対話しつつ、意見の修正・合意を通して得られるところの相互主観性が求められることになる。(199 字)